

# やぶなべ

青森県立青森高等学校生物部 発行

誌名	やぶなべ
号/発行年/頁	26 / 1982 / 88-94
タイトル	八甲田の高山植物(1981)
著者名	和田龍一

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

- 1981 -

# 八甲田の高山植物

和田龍一

8月11日。今日はこのキャンプの第一の目的の八甲田登山の日です。貸し切りのバスを降りたところです。地獄沼側の口から登り、大岳の頂上で昼食をとり、毛無谷を通過して下りてこようという計画です。でも、空はどんよりと曇っていて、見渡す限りの青空と山の自然を満喫できるといった感じではありません。それでもみんなうれしそうではねるように登って行きます。

入り口の看板の下でさっそく花を見つけます。葉をいっばいつけた黄色い花のイワオトギリです。イワオトギリは漢字で書くと、「岩着切」となって、これは昔語りからついた名だということです。さて登り始めると山道の左右はきれいに刈られています。植物に気をとられて前のみんなの姿は見えなくなっていました。この山道のわきのやぶに首をつっこんでみると、意外といろんなものが見つかります。ギンリョウソウ、マイヅルソウ、いろいろなシダ、そしてツルリンドウもそのひとつです。紫色であまり大きく開かないラッパ形の花で、つぼみはアサガオのようです。ツルは赤茶色で、地面をはったり、やぶの木や草に巻きついていきます。といてもきつく巻きついていいるのではなく、ひっかかっているといった方がよいのかも知れません。寝不足のためか、もう疲れてしまいました。昨夜は三年生の先輩と一緒にのテントで寝たのですがそのいびきのすごいことすごいこと。テントのむすくるしさの上にそのいびきで眠られなかったのです。その先輩が上の方で呼んでいます。倒れ木の上の植物を指して腐生植物ではないかといいます。高さ5~6センチの植物なのですが白い花で地下のツルが大変長く、葉は地面の上に開いています。地上の茎は茶色で、葉は互生

で、とても小さく、ほりしたきれいなかわいらしい花です。これをアリトソ、シランといいます。ここから、少し開けた所に出ます。遅れた私一人が行くと、先生を中心にみんな又毛を持って集まっています。黄色い花が、みんなの中心に咲いています。よく見ると小さい花がたくさん集まって、固まりのようになっています。葉はとても細く、四方八方に出ています。この花をキバナノカワラマンバといいます。すぐそばにはノゴキリソウがあります。これも小さな花が集まってひとつの固まりをつくっていて、葉は名の如く、裂が大きく、ノゴキリのようです。ふたつの花の写真を撮っておきましょう。

ここから先はあまりおもしろい景色ではなく、ところどころ岩のある道が続いています。あまり足元の草に気をとられていて、更に遅れてしまいました。ミヤマホツツジ、ハフサンホウフウ、イワテトウキ、シラネニンジンが、行く先々に見られます。このハフサンホウフウ、イワテトウキ、シラネニンジンには花だけでは区別が付きません。3つとも、おまんこ逆さにしたように細く伸びた花茎の先に、白い小さな小さな花をつけます。区別は葉でします。ホウフウは太い丸をした葉でトウキはそれよりは少し細く、ニンジンはずごく細かく分かれています。これらはみな同じセリ科の植物なので花がそっくりなのです。

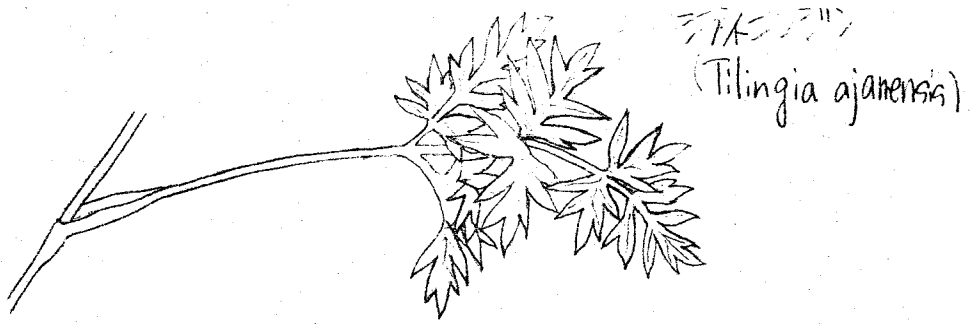
この辺りは1400m以下の亜高山帯で、日本海側の気候に属しています。右手には先の枯れたアオモリドマツが見え、その先には谷が見えてきます。やっと何とかみんなに追いつきました。したに道は細くなり、岩のころからイオウ臭い谷に出ます。谷の水は飲めません。この辺りにはシラタマノキがあって、この実を割るとサロメチルの匂いがします。谷を渡ると岩場です。ここで一息いれます。岩には緑色の鮮苔類がたくさんついています。谷の水は飲めないといっても、上方に目をやると、アザミや花の終わったマルバシモツケが見られます。右側の崖には、マイヅルソウや赤くてかかになったイワカガミの葉が所狭しと生えています。

ノリウツギも見られます。ノリウツギはアジサイの仲間。盛りの白い花は純白というにふさわしく、緑によく映えるのですが、花の終わったものは汚なく茶色がかってしまい、とても見られたものではありません。この谷を過ぎると、いよいよふらふらしくなり、緑が一段と濃くなります。道は湿っぽくなり、水たまりもあつたりで、靴は汚くなります。足元のちよとした流れの中を注意して見ると、アラリアが見られます。道はたには、チンケルマの小さな葉が敷きつめられているところもあります。チンケルマは7月頃が花盛りで、今頃見られるのはほとんどが種子です。また、低い草をかき分けると、青い小さな花がつつましく可憐に咲いています。ミヤマリンドウです。緑色の中にぽつんぽつんと見られるのが、何とも言えません。まわりには、エバイケイソウやヨツバシオカマも見られます。ヨツバシオカマは赤紫の花ですが、初めて見る人には、緑と赤紫の対照を奇異に感じる人がいるかも知れません。ヨツバというのは葉が4枚に切れていることからつきました。ここを登りきると、水呑場に着きます。

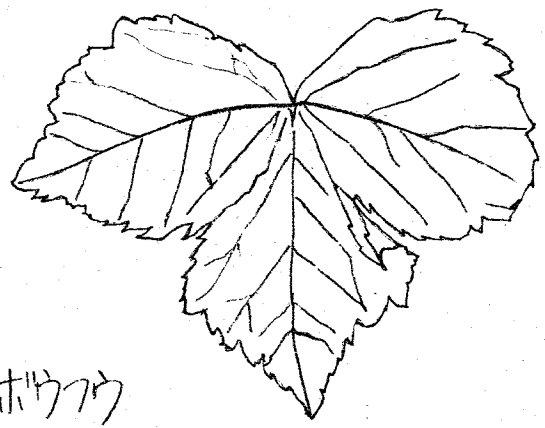
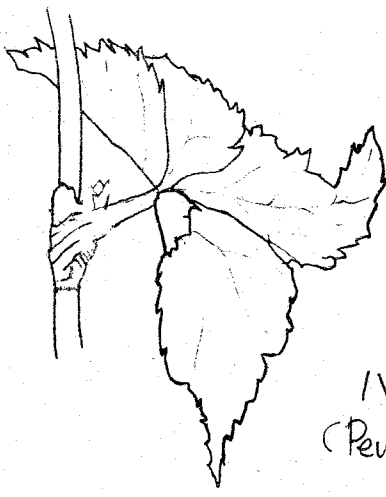
この水呑場のある所は先かすつと開けていて、ヒュッテがあり、ヒナ岳か目の前に、大岳が左側に見えます。昨年は大変天気がよく、はっきりした稜線が見えたのですが、今日は霞がかかったようにはっきりしません。それもまた、趣きがあってよいのでしょうか。水呑場も私たちにとっては絶好の観察場所です。水温は1℃。石を叩いてみましょう。何やら動く影があります。トワタカワケラです。持ち上げた石には、アラリアがついています。こんな所にとこから虫がやってきたのでしょうか。不思議です。

#### ※図説明

上から シラネニンジン、ハクサンボウケウ、イデトウキの子種。  
すべし科の植物。葉の形からこの子種を見分けろ。



三ツトク  
(*Tilingia ajanensis*)



ハナハシホウケ  
(*Peucedanum multivittatum*)



イワトウキ  
(*Angelica acutibba* sp. *inatanensis*)

S.I.

この先を左に折れると大岳です。この辺りにはコバイケイの白い花、イワイチョウ、ミヤマキンボウ、アオノツカサハラ、チンアルマ、ヨツバシオガマ、ミヤマリンドウなどが、多数見られます。コバイケイは下の方では種子のものがほとんどでしたが、ここでは今が花盛りといった感じで、細長いバナナのような花穂が3、4本集まっています。イワイチョウは葉は腎臓形で、5弁の白い花が咲きます。イワイチョウは八甲田の辺りではどこでも見らると言ってもよく、はっきり言ってもうあきました。ミヤマキンボウは丸い黄色の花をつけ、葉は鳥の足形を太くしたようで、大きく裂けています。アオノツカサハラは、松の木の先に、あんまんと逆にしたような花をつけると言ったらよいでしょうか。背丈はあまり高くはなく、20cmもありません。これによく似た植物に、ガンゴウランがあります。ガンゴウランはもう少し背丈が低くなり、地面に敷かれたようになります。チンアルマは中心が黄色で花弁は白の割と大きめの花です。葉は小さく、縁は細かくぎざぎざになっています。種子はアザミの種のようなケサラン、サランのような感じです。残念ながら花期は7月頃で、今はこの種子しか見られません。

ここを過ぎると、目の前は大岳で、少しやぶとくらくることになります。道道、マイツルソウや赤い実をつけたハリフキが目につきます。ハリフキの葉脈上にはとげが立っていて、赤い実は大きな葉の緑と対照的で、よく目立ちます。さっ、いよいよ粗いじャリの斜面です。ややもすると、足をとられそうになります。霧がかかって、じっとりぬれるようです。先程見たコバイケイの咲いていた辺りが、上から望めます。落石にも注意して下さい。こういう所でも、ガンゴウラン、チンアルマ、イワギキョウ、ミヤマオヤマキ、イワベンケイが見られます。もっともミヤマオヤマキはすでに種子になっていて、あの奇妙な形の花は見られません。風が一層強くなります。湿、ほい風です。ちよと遅れた女の子もいましたが、何とか頂上に着きました。ガンゴウランのカーペットを踏みしめ、火口中央部に降り立ちます。昨年ここへ入

った時の、あの息の詰まるような暑苦しさは感じられません。風はほとんどなくなってきたものの、少し寒く、霧がのしかかります。イワギキョウが地面一杯に咲いています。雨の降り出しそうな空を横目に、ちょっと慌てた昼食。大岳の東斜面にまわります。高さ60cm位の赤黒い草が何本か見えます。よく見ると花卉は赤黒く、中心には黄色のおしべ、めしべが見えます。鮮やかな色の対比です。この草の根元は、シュロのような皮に覆われていて、ここからオオシュロソウと呼ばれています。更に降りると、岩壁にいっぱい葉がくっついていきます。葉は全緑で少し丸まっています。ムシリスミシです。花はすでに終わってしまっていますが、中には種子をつけたものもあります。少し種をとっていきましょう。驚く事なかれ、ムシリスミシはスミシ科ではなく、タマキモ科です。ムシトリスミシと一緒に、たった1枚の葉をつけ、ひろひろ伸びた白い花のウメバチソウが咲いています。また扇のような葉をつけたミヤマタイモンジソウも見られます。葉にはまばらに毛が生え、風車のような5枚の細い花卉をつけています。強い風で、花がゆらゆらと揺れます。ここでちょっとしたカールに着きます。黄色、ペンス白といった色が、緑の中にまばらに見えます。黄色は大きなシノキンバイです。5枚の萼片はかなり太って大きく、まじにさかすきのような感じです。葉は細かく裂けています。ミヤマキンバイというのもありますが、この花はすと小さく、岩の上などにこじんまり集まって咲く花です。ピンク色の花はイワカガミです。花冠の先は細かく裂けており、葉は丸く、長い葉柄の先につきます。白はどこにでもあるイワイチョウです。この右下には雪溪があります。ここで雪溪の水を飲んでいきましょう。先生が転びました。おしりが真っ黒になっています。下へ走るように降りて行くのがいます。雪解け水の温度は、0℃です。でも、この土くさい水の味は何とも言えません。この雪溪は9月にはすっかりなくなってしまい、大きな岩がむき出しになって、ヒナザクラ、ミヤマリンドウ、イワイチョウが顔を見せます。

やぶをくぐって毛無岱に抜ける道に出ます。目の前は井戸岳です。少し天気がよくなったのでしょうか。毛無岱まで林をくぐるのですが、足元に注意しなければならず、花を見る暇はありません。先生が説明のために列を止められた間にやぶをかきまわすと、ギンリョウソウを見つけました。もう茶色に変色しかかっています。まともに立つこともできません。先はちよつとふくらんで、種になっています。7月頃、柔かい土の上に日を避けるように純白の花を咲かせていた頃と、えらい違いです。毛無岱の手前で、少し休憩です。ミスバショウの葉が、水たまりに汚なく重なっています。ここはちよつと開けた所になっています。ヤマサギソウ、エゾシオカマショウジョウバカマが見られます。ショウジョウバカマは、もうすでに種子になっています。湿原へはすぐに出られ、本道へ上がって、湿原をあらさなないように行きます。みんなの歩くピッチが、少しあがります。とうとう雨が降ってきました。決死の行進です。本道の方へツルコケモモが手を伸ばし、湿原の水たまりにはカワモズク、ミヤマホタルイが見られます。木の緑が目立つ所には、赤い実をつけたアカミノイヌツゲがあります。7月にたくさん実をつけたのを見ましたから、これはその残りの方なのかも知りません。たんだん疲れてきました。何となく歩いているといった感じです。しだいに木々の間をぐるようになり、小さな谷をひとつ越え、ふたつ越え……。酸湯へはもう少しです。車の音が微かに聞こえます。長い下りの階段を降りると、酸湯温泉です。みんなで記念写真を撮りましょう。雨さえなければ、最高の登山でした。